

プラハ日本人学校における国際交流

前在チェコ日本国大使館付属プラハ日本人学校 教諭
奈良県奈良市教育委員会 指導主事 西川 澄子

キーワード：チェコ、プラハ、現地校交流

1. はじめに

2015年4月から2018年3月までの3年間、チェコ共和国のプラハ日本人学校で勤務する機会を頂いた。チェコ共和国は地理的にヨーロッパのほぼ中央に位置しており、西部ボヘミア地方と東部のモラヴィア地方からなっている。昔から、この地域は地理上ばかりでなく、政治・経済・文化の面でもヨーロッパの中心として各地にいろいろな影響を与えており、このためチェコは「ヨーロッパの心臓」とも呼ばれている。18世紀から19世紀にかけて強大なオーストリア・ハンガリー帝国の支配を受けていた時代には、都市部や公的な場ではドイツ語の使用が強制された。しかし人形劇や地方をまわる巡業の芝居ではチェコ語の使用が認められており、旅芸人たちは当時プラハで流行っていた話題、ファッションや政治について面白おかしく芝居仕立てにして、地方の民衆に披露していた。結果としてそれが、チェコ語を守る、ひいてはチェコ人としてのアイデンティティーを守ることに結びついたと言われている。チェコで生活する中で、チェコ語の習得は大変困難であることに気づき、言語の中でも特に難しいと考えられているチェコ語を扱うチェコ人が、チェコ語以外の言語にどのように向き合い、習得しているかに興味を持った。現地校との交流を通し、それらを見聞することで、私自身、外国語教育について新たな発見をすることもできたが、それ以上にプラハ日本人学校の児童生徒たちが、外国語を学び、使用することに臆することなく向き合える姿勢をもつことができたことは大きな成果であったと思われる。ここにその事例を紹介し、チェコでの報告とする。

2. チェコの教育について

(1) チェコの教育制度について

チェコの教育は無料で6歳から15歳が義務教育である。1年生から5年生が小学生で、6年生から9年生が中学生である。1学期は9月1日から12月末、2学期は1月1日から6月末まで。6年生から（学校によっては8年生から）テストに合格すると普通の中学に行かずに、ギムナジウムと呼ばれる大学進学コースの中学校に進学ができる。公立学校の場合、義務教育の間の授業料は無料。教科書は実費負担。

(2) チェコの外国語教育

①第二次世界大戦終了まで

1918年からボヘミア・モラヴィア保護領になるまでの20年間、外国語教育は主にドイツ語とフランス語であり、保護領時代はドイツ語中心だった。

②戦後

ロシア語が必修となった。ロシア語以外の外国語は高校から学ぶことができた。英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語から1つ選択するという方式が一般的だった。ドイツ語圏と国境を接しており、しかも当時の東ドイツは政治体制を同じくする国家だったので学びやすかった。英語の重要性は認識されながらも、一般には必修科目となっていなかった。

③最近の状況

1989年の「ビロード革命」を経て、1990年に学校法が新たに制定された。これによって、ロシア語がもっていた特権的な地位は失われ、選択外国語のうちの1つにすぎなくなった。高校卒業試験で受験すべき外国語

科目は、自分が習得してきた外国語のうち1つを選べるようになった。外国へ自由に行けるようになり、旅行やビジネスの機会が増加したことに伴い、外国語学習熱が高まった。とりわけ運用能力を身に付けようと熱心に取り組むようになり、現在では早期から言語教育に重きが置かれている。これは、言語の習得が雇用機会、ひいては人生により多くの可能性をもたらすと考えられているからである。

(3) チェコの英語教育

英語は外国語の主たる言語で、小学3年生から義務化されているが、特別言語学校など、学校によっては小学1年生からスタートする。英語の授業は初期段階では週2時間程度であるが、5年生では週3時間になる。中学校では、英語と他の外国語が必修になる。外国語学習の時間は週4時間程度であるが、大学入試や大学院入試には英語が必須科目である。一般的に学校は概ね30人編成であるが、英語の授業時は上級クラスと非上級クラスに分け、それぞれの習得度に応じたきめの細かい指導が行われている。多くの生徒はケンブリッジ英検、TOEFL (Test of English as a Foreign Language) または他の外国語学校のテストへの合格をめざし、語学力を高めるために英語圏に留学する傾向がある。

3. 現地校との交流活動

(1) ZŠ Brigádníků (ブリガドニーク基礎学校)

①活動内容及び活動の様子

外国語学習に熱心であるチェコの教育現場に接するために、本校4、5年生(18名)とブリガドニーク基礎学校4年生(23名)の交流活動を行った。まず、チェコ語の授業を参観。電子黒板を活用した授業を、子どもたちも興味をもって見ていた。その後、1枚のカードに絵を描き、その単語をチェコ語、英語、日本語で書く「絵画言語辞典」を作成した。ペアになり、一緒に絵を描いたり、言葉を教え合ったりした。次に、書道を教える活動を行った。すでにペアになっていた児童と一緒に座り、まず自分が手本を書いて見せ、次にブリガドニーク校の児童が書き、練習をした。簡単な英語やジェスチャーで説明したり、手を添えて一緒に書きながら教えたりする姿があった。最後にブリガドニーク校の児童が色紙に書をしたためた。また、事前に準備していた児童手製のしおりをプレゼントした。ブリガドニーク校の児童にとって、書道は初めての体験であり、大変喜ばれ、また、その様子を見て、日本人学校の子どもたちも達成感や交流の楽しさを味わうことができていた。



手を添えて教えている様子

チェコの子どもたちの英語を話すことに対する抵抗感は、日本人の児童に比べて小さいように感じた。分からなければすぐに教師に頼る日本の児童とは大きく異なり、間違いをおそれることなく英語を使っていた。綴りに関しては、学校(school)をscholと書いている子がいたが、推測するにチェコ語がškolaだからであり、そういった間違いに臆することなく、積極的に書く・話すという英語活動を行い、自分たちで何とかしようという意欲が感じられた。また、英語担当教師もチェコ語をほとんど使わず、授業の80%を英語で行っており、英語教育に対する意識の高さを感じた。

②成果

- ・ペアを作ったことで、相手意識を持って活動を進める姿があった。個人対個人の関わりができたことで、積極的に話したり、手を取って活動したりする姿が見られた。
- ・「教える」ということで、簡単な英語を使ってなんとかしようという積極的な姿勢が見られた。
- ・「書道」という活動が中心だったので、言葉が通じなくてもジェスチャーで伝えるなどし、コミュニケーションをとる楽しさを味わうことができた。

〈児童の感想より〉

「最初は、チェコ人との交流にドキドキしました。私たちはチェコの子に習字を教えました。やっぱり言葉がぜんぜんちがうので、教えるのも聞くのもとてもむずかしいことに気づきました。でもチェコ人と交流できて、とてもいい経験ができて良かったです」

③課題

- ・ 交流が継続できるとよいが、学年、クラス、担任の先生によって状況は変わると思われる。
- ・ 何回かの交流活動の経験を積み重ね、自分たちの手で交流の計画・準備・実行が全てできるとよい。
- ・ 交流に使うチェコ語、英語を事前に練習できるとなおよい。

(2) Gymnazium Evolution Sazavska (ギムナジウム エヴォリューション サーザフスカ校)

中学部の生徒は、選択科目として日本語クラスが設けられている学校と交流活動を行った。この学校では、英語の授業が週に3コマ実施されており、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠): Learning, teaching, assessmentのB1レベルが到達目標として掲げられている。英語を話すレベルはかなり高く、日常会話はほとんど問題がない。日本に興味をもつ生徒も多く、交流活動も意欲的であった。

①活動内容及び様子

本校中学部(17名)と相手校・日本語クラス受講生(20名)の交流活動を行った。まず、自己紹介を行った。事前に準備しておいた自分の名刺を渡しながらか、氏名だけでなく、趣味などを伝え合うことから始めた。その後、他己紹介を行い、英語、チェコ語、日本語の入り混じったウォームアップとなった。

それぞれの学校を2つのグループに分け、社会科と英語科に分かれて日本人教師主導の授業を行った。

[社会科]

- ・ 日本の特徴について日本人として、チェコ人としての意見を述べる。
- ・ チェコの特徴について日本人として、チェコ人としての意見を述べる。
- ・ 互いの共通性や差異点について確認する。
- ・ それぞれの国の特徴について、根拠を示しながら、英語で発表した。
- ・ 統計資料をもとに人口や面積を比較し、人口密度の差を指摘する生徒もいた。



意見を述べている様子

[英語科]

- ・ 「浦島太郎」、「鶴の恩返し」を英訳し、互いに読み合う。
- ・ 感想を述べ合う。
- ・ 互いの国の文学作品や漫画などの大衆文化について語り合うことにもつながった。

②成果

- ・ 自己紹介によるカード交換、社会・英語の授業を通して交流を深めることができた。
- ・ どちらの教科においても、互いの国の文化について熟考することができた。共通点や相違点を見出し、より客観的に考えることができた。
- ・ 英語による説明、音読、意見交換で英語力を高めることができた。
- ・ 相手校の生徒の堂々と自分の意見を述べる態度から、自信を持って話すことの大切さを学ぶことができた。

③課題

- ・ 一方的に意見を述べることはできても、その意見を基に話し合うことは難しい。準備してきたことに加えて、その場でも考え発表する力が不足している。
- ・ 積極的に英語を使ってはいたが、自分の技量以上の表現を求めてしまい、相手にわかりやすく伝えることができない場合もあった。
- ・ 早めに交渉はしていたが、相手校の対応が遅く、最終決定が直前になった。何日までに何をするといったよ

うなタイムテーブルをもとに連絡・調整すればよいだろう。

- ・学習内容を一方的に決めた。相手のリクエストやこれまでの感想を確認してもよいのではないか。

4. おわりに

斎藤前校長先生は折に触れ子どもたちに『3つの出会い』の話しをされた。『人との出会い』『チェコとの出会い』『自分との出会い』だ。現地校との交流は、まさにこの『3つの出会い』の集大成であろう。また、児童生徒だけでなく、私自身も貴重な『出会い』をすることができた。派遣中の2017年はチェコ・日本国交回復60周年であった。今後、さらに日本とチェコの交流が盛んになることを期待している。そして、これからも在外派遣で学んだことや経験したことを子どもたちに発信し続け、国際社会で活躍する人材の育成を目指したい。

参考文献

- ・チェコ共和国の言語状況、言語政策および外国語教育事情（金指久美子論文より）